

国語**【解答】**

I

問1	問2	問3	問4	問5
e	c	e	c	d
問6	問7	問8	問9	問10
a	b	d	c	b
問11	問12	問13	問14	問15
c	a	b	c	b
問16	隣人のような自分と境遇や持ち物が共通する人が自分より良いものを持っていると妬みの感情が湧きやすいから			

II

問1	問2	問3	問4	問5
b	b	d	c	b
問6	問7	問8	問9	問10
e	d	a	d	d
問11	問12	問13	問14	問15
e	b	e	c	b

【学習アドバイス】

本学の入試は100分間の解答時間で2科目を選択解答する。国語を選択した場合はおおむね50分間で現代文の大問2題に解答することになる。本年度は高橋英彦『なぜ他人の不幸は蜜の味なのか』(幻冬舎ルネッサンス新書)と森博嗣『科学的とはどういう意味か』(幻冬舎新書)から出題された。例年同様、平易な表現で極めて現代的な話題を取り上げていて、高校生にも非常に読みやすい文章であった。

大問Ⅰの文章量が約4,500字、大問Ⅱのそれが約4,000字である。総設問数は31問、その内訳は5肢択一式の客観問題が30問、50字以内での記述解答問題が1問だった。大問1題に25分間を費やせるので、全設問に手をつけることは難しいことではない。とはいえ、大問2題で総文字数8,500字前後の文章を読まなければならないので、普段から解答時間を意識した問題演習に取り組んでいないと、自信を持って完答できなくなる可能性がある。現代人の問題意識を刺激する興味深い内容について平易な表現で綴った文章を、3,500字から4,500字ほどで切り出した長文として読ませることは、本学のみならず、昨今の入試現代文では一般的な傾向になりつつある。それゆえ、本学を志望するのであれば、このくらいの文量が「標準」なのだという認識のもと、受験対策を進めよう。

本年度の出題内容は以下の通りである。空欄補充問題が17問、語彙に関する問題が7問、内容一致問題が2問、要旨把握問題が2問、指示語の指示対象を把握する問題が1問、理由説明問題が1問、そして記述解答問題が1問である。漢字の書き取りおよび読み取りはまったく出題されなかった。また、口語文法のような知識問題も見られなかった。ただし、過去にはこれらも出題されている。漢字の書き取りが10問ほど出題された年度もあった。次年度以降、再び出題されるかもしれないので、対策は十分に講じておこう。

内容一致問題と要旨把握問題は、もちろん、文章全体の理解を前提に出題されている。4,000字超の長文の全体を、二度も三度も読み返すだけの時間的余裕はないだろう。そうであれば、一読して全体の理解が鮮明なうちに、まずこれらに解答するという方法も有効であろう。ほかの設問に解答し終えて、最後にこれらに取り掛かると、細部の理解がおぼろになっている恐れもあるからである。

その他の空欄補充問題や指示語の問題および理由説明問題は、部分解釈で対応できるものが過半を占めるので、空欄や傍線部の前後を正確に読み取れば、さほど困難なく解答できるだろう。読み手の解釈にゆだねられるような解答の根拠が曖昧な設問は、本学では出題されていない。また、空欄補充問題でも実質的には語彙に関する設問が少なくない。したがって、日本語の語彙を増やす努力が必要だろう。母語である日本語に対して、英単語を暗記する場合のような半ば機械的な作業は似つかわしくないと感じられるかもしれないが、正確な語義を記憶していくという作業は、国語力すなわち日本語力の向上にも欠かせない。50字以内での記述解答問題は、これに慣れていないか、それだけでも大きく差がつくだろう。極めて基礎的で良質な出題なので、30字から60字程度までの記述解答問題を集めた薄手の問題集で演習を積んでおけば何の心配もない。逆に、何の準備もしないままでは何も書けないかもしれない。

受験対策を最後にまとめておく。当然のことながら、学校の授業は非常に大切である。教科書は、実は、最新の思潮を扱った良質な文章の集大成である。この事実を見落としている高校生が意外にも少なくない。教科書に収載された文章の中から、少しでも興味を引かれたものは、その出典をぜひとも読もう。本学でしばしば出題されるような新書を中心に選択しても有効だろう。読書量と現代文の学力とは正比例する。これは紛れもない事実である。読書を通じて語彙を増やす。語義が不明であればすぐに辞書で調べる。こうした作業を、ある程度の期間、積み重ねられれば、本学への合格は確実になるだろう。